

世界で日本エンタメが魅力的なものとして受け入れられる方法について、その国々の文化や宗教感に受け入れられ易い形、つまり「モダン」に見せる事が重要であると、「HANABI」での海外公演などで検証されました。

私がプロデューサーする「HANABI」プロジェクトは2年前ほどから

・日本が歴史とともに育んだ伝統芸能、文化・世界をリードする日本テクノロジージャーナル

この2つの要素をDJが心に直接訴える事ができる「音楽」と「空間」を融合させ表現するという事にチャレンジしています。

一方、現在も向き合っている国内での課題があります。

それは守り続けられた伝統芸能文化との向き合い方です。

これまでこのプロジェクト始動以来、様々な日本の伝統を受け継ぐ方々とお会いしプロジェクトの説明をしてきました。しかしお会いした方々の半分以上の方の表情が曇るので、その都度相手の言葉から懸念点を分析すると共通のキーワードが浮かび上がりました。「変化に慎重な伝承」

室町時代に確立された能楽を筆頭に何百年という時代の流れの中で守り伝承し続けてきた技術や所作。それを現代風にアレンジし受け入れられやすくする事への懸念。更にアレンジを加える事での伝承された基本的「型」への破壊や冒険行為などと誤解を生み出し守られてきた業界内の孤立。こんな声を前にして、プロジェクト始動時は企画倒れも危惧した時期がありました。

そんな中、我々プロデューサー陣と伝承者側

## 『日本エンタメの融合とその課題』

文 岸本公平 text by Kohei Kishimoto

とを結びつけてくれる言葉を「HANABI」のメンバーで津軽三味線奏者の久保田祐司氏の一言から見つける事がありました。彼が雑談中ふと「僕がやってる津軽三味線は150年の歴史で伝統芸能と言われている。他の伝統芸能と比べて歴史が浅いので今伝統を創っている最中なんだよね。」

この言葉に我々は確信を得ました。伝統芸能文化に対して無理に変化を求めると、新しいエンタメコンテンツに「要素」の一つとして取り入れる。それによりこれまで伝承されてきた変化を嫌う「型」の部分との住み分けができる。更に観る側が「要素」に興味を持つ事で伝承されてきたオリジナルの伝統芸能文化の裾野拡大にも繋がるのではないのでしょうか？

『HANABIプロジェクト』は海外への文化発信を中心にクールジャパン事業の認定も頂く事ができました。日本エンタメコンテンツの創造発信、国内での日本エンタメの再発見とリブランディング。この二つの軸をブラさずに将来的な伝統芸能文化の起点となる事をプロジェクトの骨子としていかなければならないと考えています。

東京五輪開催決定以降、世界中が日本に注目する今、変化を恐れず、成長するエンタメコンテンツを創造する事が日本を世界に発信する事になり、次の世代の日本人へ伝統を残すという事に繋がるのではないのでしょうか？そして、個人の感覚の中に「母国」という概念が薄らいでいく中、エンタメこそが「国」を感じるものになるのではないのでしょうか？

### Profile

株式会社NEWTRAL代表取締役  
HANABIプロジェクトプロデューサー  
福岡県出身。日本大学中退後、テレビ番組制作会社入社。その後ディレクター、プロデューサーなどを経て、30歳の時株式会社NEWTRALを設立。メディアで学んだ企画やプロデュースの視点を生かし、企業のコンサルティングはもとより、地方創生事業やクールジャパン事業に取り組む。

